

宮城教育大学
教育復興支援センター

**自分たちに
出来ることはなにか。**

活動して思ったこと、伝えたいこと

学生ボランティア活動報告書2012

**被災地の
子どもと
大学生**



学生ボランティア活動報告書 2012

No	大学名	氏名	タイトル	頁
1	北海道教育大学	澁谷 佑里奈	私にできる小さなこと	2
2	北海道教育大学	河畑 潤平	ボランティアを通して学んだこと	4
3	上越教育大学	武田 潤也 安藤 裕子	「一緒に学んでけらい」 …学習支援ボランティアを通して見えたもの	6
4	愛知教育大学	青木 裕樹 大河原 尚吾 長谷川 直哉	復興を願う私達にできること	8
5	奈良教育大学	親木 翔平 関川 絵里	私たちにできることとは	10
6	京都教育大学	服部 歩輝 金谷 旭晋	関西から考える、被災地の子どもたち	12
7	大阪教育大学	小片 琢也 貫岡 美幸	一期一会	14
8	福岡教育大学	藪 亀圭一朗	復興支援ボランティアを終えて	16
9	群馬大学	金井 俊輔 萩口 真衣 塩野 帆生 五十嵐 良介 堀 貴之	復興支援ボランティアに参加して	18
10	早稲田大学	塚本 千尋	早稲田大学気仙沼チーム子ども班	20
11	早稲田大学	一杉 芽美	閑上中学校における学習支援活動	22
12	東北大学	本山 敬祐	石巻好文館高等学校夏の学習会	24
13	東北大学	登川 希香	塩竈市サマースクール	25
14	東北学院大学	小野 悠紀	ボランティア活動報告	26
15	東北学院大学	阿部 夏紀	タイトル ボランティアに参加して変わったこと	28
16	宮城教育大学	菅原 滉平	学府くりはら塾の5年間と私	30
17	宮城教育大学	佐野 愛美	教育復興支援ボランティアを行って	32
18	宮城教育大学	清水 美那	丸森学習支援ボランティアに参加して	34
19	宮城教育大学	菅原 利恵	たいわサマースクールに参加して	36
20	宮城教育大学	中村 かおり	丸森町小・中学校学習支援ボランティアについて	38
21	宮城教育大学	相澤 幸之助	梨の花プロジェクト	40
22	宮城教育大学	西岡 慧	梨の花プロジェクト	41
23	宮城教育大学	堀籠 崇志	梨の花プロジェクト	42
24	宮城教育大学	茂泉 宥哉	梨の花プロジェクト	43
25	宮城教育大学	渡部 早紀	震災からの復興～私たちが今できること	44
26	宮城教育大学	加藤 郁美	ボランティアをして気付いたこと	45

活動場所：志津川中学校

「私にできる小さなこと」

北海道教育大学教育学部釧路校

地域教育開発専攻・社会教育研究室

澁谷佑里奈

1. 活動動機

過去 1 年間の震災復興ボランティアに参加した動機としては、自身の故郷・宮城県や、家族を始めとする知り合いたちが被害に遭ったことが大きい。大好きな故郷にいつかは戻り、故郷のために尽力したいと思っており、今回の震災では「遠い釧路にただいるのではなく、なにか自分にもできることはないか」と強く思ったことが活動参加のきっかけとなった。また、現場に赴き、現地の人々やその声を聞くことが、第一に重要ではないかと考えたためでもある。

2. 活動概要

過去 2 回に渡りボランティアに参加させていただいた。昨年 9 月には福島県南相馬市に、今年 3 月には宮城県志津川町の中学校の学習支援のボランティアに参加した。いずれも本釧路校を越え様々な地域の学生とともに意見を交換し、各ボランティア先の地域の方々、ボランティア受け入れ校の職員の方々に貴重な話を伺ったり意見交換をすることができた。震災の傷跡が残る町の様子を実際に見たことも、現場に出向かうことの意義として再確認させられた貴重な経験となった。また、ボランティア後は、研究室の前期研究テーマとして、「震災復興のための支援の在り方や、地域ネットワークの構成について」を学び、他に NPO の学習支援事業に参加し、復興支援や地域活性化についての追加研究を行っている。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

震災を受けた現地に赴き、何より強く感じたことは、志津川中学校校長の「現場主義」という言葉の妥当性であった。自身が住む釧路市内では東日本大震災の被害はほとんどないせいか、地域や学内では、そこまで復興支援事業は振興しなかった。経験していないことや自身の身に降り掛からない限りではその重要性は生まれず、関心も薄れていくという現実がある。ゆえに、いかに復興支援や地域と連携することの重要性を伝えるか模索したところで、「現実（リアリティ）」を効果的かつ効率的に伝えることが重要と考えるに至った。

また、現地に行き、地域の人々やボランティアの学生と関わり、「人が居ることの大切さ」を痛感した。何事も“人”が居なくては始まらない。地域を構成

するものは“人”であり、活動を企画し運営するのも“人”である。ゆえに、「人々の関わり」に注目した。誰か一人が活動し、活動に関わった人、その周りの人々…と肥大し拡大していくプロセスこそが復興支援、地域づくりには欠かせないのだと、今回の震災を通して実感したのである。

また、今回の震災を経験した人々から、「人によるネットワークの有用性」の話聞き、それらが生成する生活や精神的な充実という意味で、より「人々の関わり」の重要性が分かった。

4. 今後どう活かしていくか

自身としては、教育機関、NPO セクター、地域住民の各主体が、震災復興に関する共通の課題を持ち、連携しながら課題を解決していく取組みが必要であると考えている。具体的取り組みとしては、各機関の分野や活動方面の特徴を活かした活動を行い、互いに補い合いながら支援活動を行うことが挙げられる。例として、大学では、専門知識を活かすことができ、また若い世代が集結していることから、活動の主動力となり、地域との関係づくりの架け橋となり、情報の発信源となることが出来る。防災訓練、災害時の救援・復旧活動の動力として、講演会会場、同じ若者に対し呼びかける、企業やNPO と連携し企画していく…など、学校機関が担えることはたくさんあるかと思う。また、NPO ならば、震災孤児やその他の震災による障害を抱えた子どもに対する支援活動など、ニーズはまだ多いと見聞きしている。私自身もとても興味があることでもある。

最後に、私自身ができるひとつの事柄として、「伝える」活動がある。まずは周りから、私自身の小さな力でもできる、かつ重要な活動であるかと思う。これらの事を記録として残し、伝え続ける。少しでもその影響を多くに与え、活動が肥大化していく様、誰か一人でも多くの助けとなる様、まずは私自身が活動することが持続可能な個人活動として考えられるのではないかと思う。

5. その他、伝えたいこと等

震災復興ボランティアに参加させていただいたことは、私自身の将来の展望にも大きな経験と影響を与えてくれた。有志として集まった同世代の仲間達や、地元で活躍する青年団の人たちには感銘を受けた。復興に関わる青年層が地域の未来を左右することの重大さを再認識し、また、本校学生たちに対して「復興活動の重要性」と「諸活動の主体者としての自覚」を喚起するなどの活動をしていきたいと思った。

「ボランティアを通して学んだこと」

北海道教育大学教育学部旭川校 社会科教育専攻 氏名 河畑 潤平

1,活動動機

私が今回南三陸町のボランティアに参加しようと思った一番の動機は、友人が今年の 8 月に南三陸町でのボランティアに行った話を聞いたからである。昨年の 3 月 11 日に東日本大震災が起き、東北地方をはじめ全国で被害があった。私は被災地のために何か少しでも役に立つことができないかと考えていたが、いざ自らがボランティアをするとすると勇気がおきず、もどかしい思いをしていた。

私の友人が 8 月に南三陸町でボランティアをした。友人の話によると、現地には多くのガレキがあり、彼らはガレキ撤去のボランティアをした。その話を聞き、彼らの行動に感動を覚えたのと同時に、自分の行動力のなさに情けないと思った。「被災地のために自分から動いていかなければ」という思いがさらに強くなった。このことがきっかけとなり、私は今年の 3 月下旬に南三陸町のボランティアに参加した。

2,活動概要

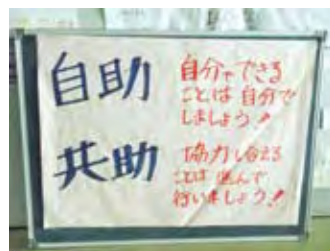
- ・ 期間 平成 24 年 3 月 26 日から 30 日
- ・ 場所 宮城県南三陸町立志津川中学校
- ・ 活動内容 部活動支援、特別校教室等の整理・整頓、使わなくなった机・イスの処分など。

(同町の戸倉中が志津川中学校校舎 1 階で 4 月から教育活動を開始するため)

3,気づいたこと・得たこと・学んだこと

南三陸町でのボランティアを通して、復興にはまだまだ時間がかかることを痛感した。震災から 1 年が経ち、私はある程度復興が進んでいるだろうと思っていた。しかし現地に入ると、復興が進んだとは言い難い状況であり、その光景に言葉を失った。被災地復興のために全国の人が被災地のために手を取り合おうとしなければならないことがわかった。

私はこの活動で報道だけでは知り得なかったことを学んだと思う。その中で私は現地の人々の「強さ」、「絆」を感じた。ボランティア活動から 2 ヶ月後に、志津川中学校から「松籟」という生徒会誌をいただいた。生徒会誌を読むと、3 年生のある女の子の作文に目を惹かれた。内容を一部抜粋して紹介すると、「私が保育士になってやりたい事は、子どもたちを笑顔にすることです。そして、子どもから親へ、親から地域へ、



地域から町全体へ笑顔の輪を広げ、最後には、南三陸町を震災前より、活気と笑顔のありふれる町にしたいです。私の目指す町へは十年、二十年かかると思っています。しかし、私はいつまでも諦めず、この町と共に前進していきたいと思っています。これからの南三陸町と私の将来が楽しみです！」この作文を読んで、震災に負けず、復興のために、町のために、将来を町のために尽くすという考えである。この作文から、私は震災から前に向かおうとする「強さ」と、町の人々とともに手を取り合おうとする「絆」を感じることができた。

ボランティア活動していく中で、志津川中学校の校長先生が「実際に現場を見て、聞いて、感じて、それをどう行動するか。現場を見ないと行動することすらできない。」ことを「現場主義」という言葉を使いながら話して下さった。

何かをするためにはまず現場を見る必要がある。現場を見てからどうすれば良いか考えるべきであることを学んだ。

4,今後どう活かしていくか

この活動を通して、私は自分の体験を多くの人たちに伝えていきたいと考えている。自分の体験を聞いた人たちに東北へボランティアに行くまたはボランティアしなくても東北へ行くきっかけを作りたい。実際に被災地を見ることによって、復興に向けて力を合わせていければ良いと考えている。

今、教育現場では「生きる力」を育むことが課題となっている。私は今回のボランティアを通じて、この経験を子どもたちに伝え、「生きる力」とはどのようなものかや強く生きることとは何かを子どもたちが考えるきっかけを作っていきたい。



5,その他、伝えたいこと等

今回の活動で一緒に参加した方から「ボランティア一人一人の力はわずかだが、その積み重ねが大きな力となる。0.1秒でも早い復興のために47都道府県の人々がみんなの手を取り合って、南三陸に、宮城県に、被災地に行くきっかけを俺らで作っていこう。」との言葉があった。これは今回のボランティアを通じて、自身の体験や現地の状況を発信し聞いた人たちに東北へ行くきっかけを自分たちで作ろうということである。

日本全国の人たちが被災地復興を願っている。ただ、願っているだけでは復興させることはできない。全国47都道府県みんなが被災地復興のために立ち上がらなければならない。今回の震災で人々の「絆」の大切さを感じることがたくさんあった。今度は復興のために「絆」を深め、みんなの手を取り合っていきましょう。頑張ろう東北。頑張ろう日本。

活動場所：角田中学校

「一緒に学んでけらい」・・・学習支援ボランティアを通して見えたもの

上越教育大学 学部1年生

武田 潤也

上越教育大学 大学院特別支援教育コース1年

安藤 裕子

1. 活動動機

私たちはそれぞれ宮城県と福島県の出身で、故郷を離れた新潟県で大学生活を送っています。被災地やそこで暮らす人々のために、自分に何か出来ることはないかといつも考えていました。そんなときに宮城教育大学教育復興支援センター様からの角田市内の小学生サマースクールでの学習支援ボランティアの募集を知り、是非参加したいと思いました。

2. 活動概要

角田市内の全小学生を対象としたサマースクールにおける自習時の学習支援ボランティア。現地では中学生のクラスにも参加しました。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

今回の角田市の学習支援ボランティアを通して、生徒の学習へのひたむきな姿勢を感じとることができました。あの大きな地震と津波によって、子どもたちが受けた衝撃は相当大きかったことと思いますが、皆とても明るく、進んで学習に取り組んでいました。



予定では小学生を、ということでしたが、中学生3年生担当へと変更があり、緊張しましたが、偶然いらっしゃった私の恩師からの「遠慮せずに中さ入

って、一緒に学んでけらい。」という言葉に力づけられ、また温かく受け入れてくれた角田中学校の皆さんのおかげで、緊張は和らいでいきました。経験不足な私がさまざまな個性ある子供たちに教えるのは難しくて、はじめは私もぎこちなく、子どもたちも恥ずかしがっていましたが、少しずつ打ち解けることができ、私達なりの支援ができたのではないかと思います。

また教えるだけではなく、自分たちも子どもたちのころに戻ったような感覚で共に学ぶことができ、休み時間や学習時間終了後にも子どもたちと触れ合うことができたことも、とてもよい経験になりました。

4. 今後どう活かしていくか

教育大学生として、実際に被災地へ行き、現地の子どもたちに学習支援を行えたことは大きな経験になりました。同じボランティア参加者の中で、学部生、院生、現職教員という違った立場の人達が交流する機会があり、教師になることへの夢、楽しさ、苦勞、重みなどについて話したり、聞いたりすることができました。

そして現地の子どもたちとの触れあいを通して、ただ教えるだけでなく、子どもの目線に立って共に学ぶことも大切だと感じました。ただ知識をつけて免許をとり、教師になるのではダメだと思います。今回のように、子どもたちが「何を抱えているのか」などを考慮することも教師として必要なことであり、ただ同情するのではなく、彼らの傷や気持ちに共感できるような教師になりたいと思います。そして子どもたちを理解することが、いじめや虐待等の防止にもつながればいいと思います。

そのために、今後控えている小学校の教育実習に向けて、子どもの目線に立つ姿勢を大事にしていこうと感じました。また、機会があったら積極的に小中学生と交流をはかり、学習以外のものも子どもたちと学ぶことができたらいと思いました。



5. その他、伝えたいこと等

学習支援ボランティアでは、3日間は長いのではないかと感じていましたが、子どもたちと角田市のみなさんのおかげで、あっという間に日程が過ぎていきました。皆さんにとっても感謝しています。子どもと私たちで、数学の問題の解を導き出した時の喜びはいまも忘れられません。また、他外学からボランティアに参加していた学生と交流できたことも良い経験でした。



被災地については感じていることは「もっと多くの人に被災地の現状を見て欲しい、知ってほしい」ということです。過去の話にしてほしくないと思います。実際に何をするでなくても、今もその土地で勉強をしている子どもや、畑を耕すお年寄りも暮らしているのだということを心に留めてほしいということです。

「復興を願う私達にできること」

愛知教育大学大学院 教育学研究科 発達教育科学専攻 教育学領域1年 青木 裕樹
 愛知教育大学 教育学部 現代学芸課程 国際文化コース3年 大河原尚吾
 愛知教育大学 教育学部 現代学芸課程 国際文化コース3年 長谷川直哉

1. 活動動機

- 1 自分の目で見たかったから。
- 2 教師として生徒の質問にちゃんと答えたかったから。
- 3 とにかく何か役に立ちたかった。自分たちに何ができるか確かめたかった。

2. 活動概要

南三陸町立志津川中学校における教育復興支援ボランティア

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
	8月20日(月)	8月21日(火)	8月22日(水)	8月23日(木)	8月24日(金)
午前	歓迎会 部活動支援	環境整備 部活動支援	環境整備 部活動支援	環境整備 部活動支援	環境整備 部活動支援
昼食		松田学長来訪		戸倉中学校長講話	
午後	自学自習支援	自学自習支援	自学自習支援	自学自習支援	自学自習支援
		南三陸町見学 防災庁舎 戸倉中学校 ボラセンター	ボラセンター長講話	気仙沼市見学	送別会
夕食		松田学長同席		志津川中学校長同席	



写真1 防災対策庁舎



写真2 環境整備



写真3 部活動支援



写真4 自学自習支援

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

- 01 20m という津波の高さを実感した。
- 02 3月11日の体験は、被災者一人一人で異なる。
- 03 「復興」は、まだ始まったばかりで、国の支援も追いついていない。
- 04 自分自身が被災地で何の役にも立たなかった。
- 05 被災地で出会う人々は、みんな笑顔で前向きだった。
- 06 復興を担う子どもたちの、それぞれに夢を語る姿が輝いていた。

- 07 被災者が自立するためには、産業復興が重要である。
- 08 ボランティア活動は、被災地での活動で終わらない。帰宅後も継続できる。
- 09 被災地の現状がマスコミで報道されなくなってきているけれども、目には見えない問題が未だに数多く残っている。
- 10 目には見えない問題を解決するために、長期的な支援が必要。
- 11 人の温かさに触れ、「絆」という言葉の意味を実感した。
- 12 これからは、心のケアという観点から「人」への支援も必要となってくる。



写真5 志津川デイサービスセンターから志津川湾を撮影。
ここも津波に襲われ、1階の天井まで浸水した。

4. 今後どう活かしていくか

- 1 ひとりでも多くの人に被災地で見聞きしたことや感じた事を伝えていく。
- 2 被災地を、被災者を、忘れないこと
- 3 教師として生徒に教えるときは、「現場」を大切にする。
- 4 教師は生徒の命を預かる仕事ということを肝に銘じる。
- 5 今回のような機会があったときには、積極的に関わるようにする。



写真6 災害VC長による講話



写真7 戸倉中学校校長による講話



写真8 気仙沼市見学

5. その他、伝えたいこと等

このような貴重な体験ができる機会を与えていただき、一同感謝しています。また、現地で関わることができた方々にも感謝を伝えたいです。ありがとうございました。そして、被災地が一日も早く復興することを心から願っています。

以上

活動場所：丸森町小中学校

「私たちにできることとは」

奈良教育大学 教育学部 学校教育教員養成課程
理数・生活科学コース 数学教育専修

親木 翔平

奈良教育大学 大学院教育学研究科 専門職学位課程 教職開発専攻

関川 絵里

1. 活動動機

東北地方太平洋沖地震の発生から1年7カ月以上経過した今、関西内陸部在住の私は、直接の被害は被っていない。そして、実際のところ、震災に対する気持ちが風化してきていた。確かに、震災に関する報道は以前に比べて少なくなってきた。しかしながら、それは復興したことを意味するものではない。

そんな中、私自身にできることを考えていたところ、教育の立場から復興に携わることのできる本活動を知り、参加を決意した。

2. 活動概要

2012年9月24日～2012年9月28日の五日間、宮城県丸森町内の小・中学校での学習補助活動が主であった。

3. 気付いたこと・得たこと・学んだこと

小学校での第一印象は、奈良の小学校の子どもと変わらないような感じであった。しかしながら、活動を続けていくことによって、多くのことに気づき、学んだ。今回はその中の三つを挙げる。

まず一つ目に、小学校の校庭の土が少し柔らかいということだ。これは、校庭の土の除染作業の影響であるという。児童らはこのことについて、少し遊びにくいと言っていた。このことも影響してか、業間休みでも校庭に出る児童は少なかったように思える。このような状況が続くと、子どもの体力低下につながりかねない。「子どもの基礎的運動能力は向上傾向にある」という文部科学省の調査結果があるが、被災地の子どもに関しては運動場の確保が困難であることや、被ばくに対する恐れから、その限りではないのだ。

このようなことが起こっているように、一見変わらないと思われる地域でも、復興はまだ終わっていないのである。

次に二つ目は、予想以上の児童相互のつながりの深さ・広さである。

例えば私たちが授業補助に入った際にも、自分らで問題を解決しようとする姿が多くうかがえた。思わず、「私たちが学習補助に来なくてもよかったのではないか？」と感じてしまう場面もいくつか存在したほどである。また、授業外

でもお互いに注意し合える関係が形成されており，他学年との交流も盛んに行われていた。

ここに，教育における重要なことが隠されているのではないだろうかと考える。児童らが主体的に学ぼうとし，行動する。学校全体での深いつながりが存在する。そういった環境での学びはきっと深いものとなるだろう。

そして最後の三つ目は，自分自身の気持ちと行動の変化である。私はこの変化が今回の一番大きな学びであったのではないかと考える。

冒頭で，参加動機の一つに「自分自身の震災に対する風化」を挙げた。活動終了後奈良に帰ってからは，東北地方や地震に関する報道に敏感になった。そして，継続的な募金活動の開始など，行動が変わった。

4. 今後どう活かしていくか

五日間の活動は，私たちにとって非常に有意義なものであった。しかしながら前述の通り，「私たち学生の活動は，本当に役に立っているのだろうか」と考えることもあった。

「他学年との交流」ができていたり，「互いに注意し合える環境」を形成できていることは，学級運営において，一つの理想形であるといえるのではないか。

例えば，昨今，いじめの問題が大きく取り上げられている。それは教員を目指す私たちは将来向き合わなければならない問題である。奈良県では，文部科学省がまとめた 2011 年度の児童生徒の問題行動調査によると，いじめ発見のきっかけは奈良県では「教職員が発見」したケースは 17.9%～26.5%にとどまっている。将来奈良県で教員になろうと考えている私たちにとって，直面する課題だ。そして，いじめの防止には「地域社会との連携が必要不可欠」といわれている。上記のような校内のつながりを形成し，それを地域全体へのつながりへと拡大していく方法を学ぶことが大切であると思う。

HR 総合調査研究所が 2012 年 7 月 9 日～19 日に行った調査によると，現在の大学生は「真面目だが，受け身」といわれることが多いという。今回の活動も，単に学んだだけで終わらせることなく，日々の学習に取り組みたい。将来，そのような環境を形成できる技能をもった教師になれるよう，行動していく。

5. その他，伝えたいこと等

また，継続的な支援方法の一つとして，募金をすることも挙げられる。現在，個人単位での募金が減ってきている。そこで，例えば公益社団法人ユネスコ協会連盟が実施している「月 1・いいことプログラム」では，少額から継続的に寄付することができる。こういった方法を利用することもあった。

1. 活動動機

東日本大震災が発生してから、連日ニュース・新聞等を通じ被災地の様子が報道されてきました。関西で暮らしている私達にとっては、報道が震災の全てであったので、報道が少なくなればなるほど、どこかで震災に対する意識も比例して薄くなっているのではないかと気づきました。

それではダメだという気持ち、被災地の現状を自分の目で見たい、何か役に立ちたいという、参加者様々な思いを抱えて、今回活動に手を挙げさせて頂きました。

2. 活動概要

夏休みに行われた夏期学習会にボランティアとして参加し、彼らが分からない問題に関して、指導や解説を行う事が主たる活動内容です。



午前中：当該中学校の先生方が部活の指導にあたっておられるので、我々ボランティアが仕切って進めていきます。午前は3年生のみの参加で、受験に向けた学習や夏休みの課題などを持ち寄り、熱心に学習していました。

午後：全学年と先生方も揃って、学習を進めていきます。私達ボランティアは5日間の活動日程の中で、なるべく多くの学年、多くの生徒と関わることができるように、ローテーションで指導にあたりました。



活動終了後：宿泊施設に戻り、翌日のローテーションを決めるとともに、その日気付いた事・考えたことをメンバーで共有するためのミーティングを開き、翌日以降の指導に役立てるように意識しました。

3. 気付いたこと・得たこと・学んだこと

参加者一同様々な視点から、多くの事を気付き、学び、考えた5日間でした。その中から、子ども達とのふれあいという視点から1つ述べたいと思います。

私たちが行かせていただいた登米市南方中学校を含む地域は、地理的には比較的內陸部に位置しているということもあり、瓦礫の山というような光景ではありませんでした。

また、子ども達も関西からやってきた私達の言葉に興味を持ってくれるなどして、非常に明るく接してくれたため、震災が起きた場所という実感があまり無かったというのが、正直なところでした。

そのため、彼らとのふとした会話の中に出てくる、「被災地」や「避難」という言葉を聞くと、こちらがハッとさせられる事が何度もありました。

一緒に学習している時や休み時間に、明るく振舞っている彼らの姿が、本当のそのままの姿であれば良いのですが、おそらくその裏側には様々な辛い感情があるのだろうなど、今になると思います。

「生徒理解」と言葉にすれば簡単ですが、直接的に震災を経験していない私達に彼らの気持ちを理解することは、大変難しいことです。そんな状況の中で私達には何が出来るか、どのような態度で接するのが一番良いか、様々なことを考えながら過ごした5日間は、人の気持ちに寄り添うという意味で非常に勉強になりました。

4. 今後どう活かしていくか

先述したように、現地の様子を見たことがない私達にとっては、報道が全てでした。しかし、かつて程の報道が少なくなってきた現在、積極的に情報を得ようとしない限り、震災は過去のものになってしまうかもしれません。

その意味においても、今回私達が経験し、感じたことは周りの人々に伝え、共有する必要があると思います。最終日に閉上で、被災地の現状を見せていただいた時に抱いた感情は、そこに行って見た人にしか分からないと思います。

この経験が、これから関西で暮らしていく中でどのように活かされていくか、その点は言葉で表すことは難しいです。しかし、教員になった際に子ども達に私達の経験を伝え、この震災を風化させず、自分の事として考えることができる姿勢を養わせたいと思います。



「一期一会」

大阪教育大学 2回生 小貫琢也 片岡美幸

動機

東日本大震災が起こった1ヶ月後に私たちは大学に入学しました。その後、大学に通いながらも震災の深刻さについて感じない日はなく、「何か自分にできることはないのか」と考える日々が続きました。そして震災から約1年半、その気持ちは変わらず、ちょうどその時今回のボランティアの募集を知り、応募しました。また、「震災にあった子どもたちは、今どのように暮らしているのか」を将来教師を目指すものとして自分の目で確かめようと思い、今回学習支援という形で参加させていただきました。

活動概要

8月8日から10日の3日間、午前中(9時30分～11時30分)の活動をしました。それぞれが派遣された学校へ行き、小学生と中学生の夏休みの宿題の質問対応を行いました。大阪教育大学の学生の他にも、宮城教育大学や上越教育大学の学生、角田市のボランティアの方々と協同で子どもたちそれぞれが必要としている勉強の手助けをしました。

気づいたこと・得たこと・学んだこと

全体的な印象としては、積極的にあいさつしたり、真面目に宿題に取り組んでいたりとしっかりしている子が多く、勉強しやすい環境でした。最初はお互いに緊張して、会話が少なかったのですが、会話をするにつれて「先生、ここ教えて」という声が増えて、いい雰囲気での学習ができたと思います。私たちが学んだことのひとつに、子どもひとりひとりが理解できるように説明することの困難さがあります。たとえ自分が理解していても、子どもが理解できるように説明できなければ、人には教えられないと実感しました。また、授業で失敗しないために、教師は事前に予習をし、分かりやすい説明ができるようにしておかなければならないとも知ることができました。活動は午前中のみという短い時間でしたが、子どもたちからたくさんの元気をもらい、子どもたちの笑顔があるからこそ教師という存在があるんだと思いました。

今後どう活かしていくか

今回ボランティアに参加させていただいて、まさに「百聞は一見にしかず」でした。自分の目で被災地を見たからこそ感じる、あるいは考えさせられることが数えきれな

いほどあり、また、学習支援においても現場だからこそ学べるものがたくさんあると知りました。これからは、震災だけに限らず何事においても、受け身なのではなく、自分から学び、行動していくように心がけていきたいです。

その他、伝えたいこと等

今回は、学習支援ボランティアでしたが、実際に活動するまでは、「子どもたちとうまく接することができるのか」また、「分かりやすく学習指導ができるのか」と心配でした。しかし活動が始まってみると「分かりやすかった!」「楽しかった!」との声が聞けて、本当に嬉しかったです。子どもたちを元気づけるために来たはずが、いつのまにか励まされたのは心配顔をした私たちのほうでした。ただ、ひとつ心残りなのは、実際の活動日が3日間という短い期間しかなかったことです。子どもたちと触れ合う時間ももっととることができ、互いに交流を深めることができたなら、尚よかったですと思います。これからもこの学習支援活動は続いていくはずですが、勉強面においても、交流面においてももっと時間が取ることができたら、この活動がさらに実りある有意義なものになると思います。また、活動1日目に被害の大きかった名取市と亶理市を見学させていただきました。1年半前まで、そこは住宅街だったと思えない光景でした。あたりを歩いてみると、お茶碗やブロック塀の破片や表札、貝殻が散らばっていました。1年半前まではここでたくさんの方が生活をしていた事実を目の当たりにして実感し、言葉も出ず、ただ立ち尽くしました。現地の方に聞いた話によると、震災の時には10mもの高さの津波がきて、町を洗い流したそうです。実際に自分の目で被災地の様子を見て、何も言葉が出ませんでした。今回、自分たちが見てきた光景、現地の方々がお話してくださった思いを忘れず、たくさんの人たちに伝え続けることが、これからの私たちの課題だと思います。「何か自分にできることはないのか」と自分に問いかけながら、このボランティアに参加しました。答えは「一期一会」。いろいろな人たちとの交流の中にあっただと思います。宮城教育大学や上越教育大学の学生たち、角田市の方々との出会いは私たちにとってかけがえのないものになりました。そして何より子どもたちの笑顔は私たちにとって財産となりました。

「復興支援ボランティアを終えて」

福岡教育大学・教育学部・初等教育教員養成課程生活・総合選修
藪亀 圭一朗

1. 活動動機

- ・震災の状況を周りの知人などに伝え一刻も早い復興を支援するため。
- ・将来教師になって子ども達に自分の体験を伝えるため。

2. 活動概要

- ・部活動のお手伝い。(野球部でのノックなど)
- ・破損した机、椅子の撤去作業
- ・教室内の清掃

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

- ・自分が笑顔でボランティアしないと復興のお手伝いにはならない。
- ・復興はまったく進んでいなかった。
- ・まず現場に行ってみることが大切であるということ。

4. 今後どう活かしていくか

・思った以上に復興は進んでいなかったので福岡の友人、知人などと手を取り合い、次来るときはたくさんの人を連れて行こうと思った。またボランティアはここで終わりではなく、自分の周りの方にこのリアルな体験を伝えていって一日も早い復興につなげる。

5. その他、伝えたいこと等

以 上

「復興支援ボランティアに参加して」

群馬大学・教育学部・数学専攻 金井俊輔
萩口真衣
塩野帆生
五十嵐良介
社会専攻 堀 貴之

1. 活動動機

昨年震災が発生し、私たちにも何かできることはないのかという思いは常に持っていました。しかし、なかなか実行に移すことができず、歯痒い気持ちでいました。

そんなとき、このボランティアのお話をいただき、「教育で復興支援のお手伝いができる」、「自分たちが大学で学んできたことを活かすチャンス」と思い、この機を逃すまいと参加させていただきました。また、その中で現地の人たちの生の声や思いを五感で感じたいと強く思っていました。

2. 活動概要

- 女川第二小学校での、夏休み学習における学習支援
 - ・各クラスに分かれ、算数や国語の学習の丸付けや、個別支援

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

○被災地から、遠く離れている私たちにとっては、新聞やニュースで目にする機会も減り、震災の記憶が薄らいできつつありました。しかし、実際は、流されてきたがれきの処理が済んでおらず、海岸沿いに山のように積まれており、住宅も地盤のみが残り、あたり一面が平野になっていました。テレビを通して見るのとその場に自分の足で立つのでは、感じ方が全く異なり、津波のすさまじさ、脅威を改めて感じました。

○ボランティアに参加するまでは、「被災地＝可哀そう」と心のどこかで思っていました。

津波で家や家族を失い、仮設住宅から通っている子どもたちが、何を感じ、思いながら生活しているのかがわからず、どのように触れ合うべきか不安でした。しかし、一緒に勉強をし、交流する中で、教育実習で触れ合った子どもたちと何一つ変わらない普通の素直な子どもたちの実態がありました。2日という短い間でしたが、子どもたちは私たちが来たことを非常に喜んでくれ、楽しい時間を共有することができました。こんな私たちにも、被災地でお手伝いできることがあるのだと改めて気づくことができました。元気づけようと意気込んでいた自分たちが、逆に子どもたちの明るさに元気づけられました。



4. 今後どう活かしていくか

学部の仲間たちに、ボランティアの経験を伝え、震災を風化させない事が重要であり、私たちにもできることがあるということ、支援の手はまだ足りていない事を伝えていくことで、ボランティア活動の参加を促し、私たち自身も、これからも積極的に取り組んでいきたいと思えます。また、来年の4月から私たちは教師という、立場になります。このボランティアに参加したことで、子どもたちに、被災地の現状、実態をよりリアルに伝えることができます。今後の自分たちの教育にも活かしていきたいと思えます。

5. その他、伝えたいこと等

このたびは、このような非常に貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。ぜひまた機会がありましたら参加させていただきたいと思えます。

早稲田大学気仙沼チーム子ども班

早稲田大学教育研究科

塚本 千尋

1. 活動動機

「居ても立ってもいられない」という思いから 2011 年 8 月に陸前高田市でのガレキ撤去ボランティアに参加し、その後は気仙沼市で活動する早稲田大学の学生チームで仮設住宅でのお茶会支援に参加。チームとしてはお茶会のかたわらで子どもたちの「宿題応援」も行っていった。

校庭に仮設住宅が立ち並ぶ光景は衝撃的だった。狭い仮設住宅での学習環境は子どもたちにとって望ましいものとはいえず、騒音などの問題から思うように遊ばせられないという保護者の声をしばしば耳にした。気仙沼に通いつづけるうち、お茶会などをおして子どもたちの置かれている状況を目にする機会が多くなり、何か手伝えることはないかと思ったのが始まりである。

気仙沼小学校に統合される南気仙沼小学校の校舎を片づけた際、子どもたちの生活の様子がうかがえるものを片づけなければならなかった。工作の作品やランドセルを捨てる時、なんとか持ち主に返せないかと思ったが、仮設住宅は狭く、返されても受け取れない場合があることを知った。その時に感じた悔しさ、やりきれなさがいまでも残っている。

2. 活動概要

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター気仙沼チーム（学生チーム）の 1 部門である「子ども班」で活動している。子ども班のメイン活動は気仙沼市における長期休みの「学び教室」支援である。今年 3 月に宮城教育大学との連携のもと「春休み学び教室」に参加し、8 月には同様に「夏休み学び教室」に参加した。いずれも 5 日間。

また、この連携プログラムのほかにも独自の活動を行っている。子ども班の活動は今年 5 月にはじまり、当初は「NPO 底上げ」の実施する学習支援活動に参加し、子どもたちと交流を深めた。6 月には「NPO 底上げ」関連のイベントの手伝い、7 月は児童館の夏祭りに参加。8 月には気仙沼高校 3 年生への学習支援活動を 3 日間行った。希望者参加の勉強合宿で生徒の質問に答える形式だった。8 月後半には学童に「宿題応援便」を派遣した。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

・子どもや教育にかかわろうとすると、学校現場は制約も多い。当初は学習支援活動を想定していたため、活動場所が見つからず苦戦した。そこで活動内容を「学習支援にとどまらず広く気仙沼の子どもにかかわること」とフレキシブルなものに改めた。メインは学習支援としつつも、児童館のお手伝いなど、幅広く活動することができている。子どもは学校だけにいるのではなく、むしろ学校以外の教育機関に目を向けることができた。

・子どもとかかわっていると、ストレートな言葉を投げかけられることがある。今夏の「夏休み学び教室」においても「お金もらってるの？」と聞かれたり「どうしてボランティアしてるの？」と問われることがあった。これは自分自身の活動の根本を考え直す機会にもなった。

・このような大学生による学習支援活動は、おそらく全国で必要とされているだろう。学習の遅れや苦手を解消するだけでなく、大学生と交流すること自体がキャリア教育の一環ともなりえる。しかし一方で全国に通用するボランティアであることが「なぜいま、気仙沼なのか」という問いを呼び込む。私は活動する中でこの問いに対する一定の回答を得ることができた。学生が懸命に目の前の子どもに向き合い、楽しく充実した時間をつくることで、子どもたちは笑顔になる。子どもの笑顔は必ず大人を元気にする。子どもの笑顔を生み出し「心の復興」をすることは、子どもためだけでなく大人たちのためにもなっていくだろう。いま日本で一番元気な大人と子どもが必要な地域は復興に向かっている地域である。だからこそ、私たちが気仙沼にかかわる意味があると考えている。

4. 今後どう活かしていくか

ガレキ撤去が一段落したときに復興支援ボランティアの第1タームが終わったと考えている。ボランティア活動はソフト面に軸足を移した、長期的なものが求められるようになってきた。このような活動においては絶えず初心を忘れず、同時に現地の状況に応じて変化していくことも求められる。「なぜ、そうするのか」「いまそれが必要か」という点を常に問い、現地のニーズを見極めることが必要になる。

そしてボランティアが過剰な「サービス」になってしまったり、現地の雇用を奪うことがないように、自分たちの活動の必要性を考えることも必要だと感じている。

5. その他、伝えたいこと等

8月に行われた「夏休み学び教室」に参加したのは教育を専門的に学んでいる学生ではなかった。それは一見、専門的知識を持つ学生に比べれば不利ことかもしれないが、今回のケースはそうではないと思っている。学生たちは予備知識を持たないからこそ、自分の全力を尽くして目の前の子ども一人ひとりと向き合い、観察し、できることを探していた。

教育の技術的側面はもちろん重要であるし有効だが、まずは一人の子どもと向き合うことが基本だ。自分の目で見て自分の頭で考え、対応する。そしてそこから得たものをまた知識へと還元する。そのような経験と理論の往還の必要性を実感している。

これからもできることを探しながら、どのような形であっても継続的に復興にかかわっていきたいと考えている。

「閑上中学校における学習支援活動」

早稲田大学院先進理工学研究科 一杉 芽美

1. 活動動機

被災地のために私にできることがあるならば役に立ちたいと思い、昨年から瓦礫撤去やイベントの警備・設営などの活動に学生ボランティアとして参加してきた。今回名取市閑上中学校での学習支援ボランティアに参加したのは、昨年の夏に閑上で開催された鎮魂灯籠流しに学生ボランティアとして参加したことがきっかけである。鎮魂灯籠流しに懸ける地元の方々の復興への想いに触れ、大きく心を動かされた一日だった。一年が経ち、現在名取市の方々がどのように過ごしているのか、名取市がどのような状態にあるのか気になっていた。学習支援の形を選んだのは、生徒たちが夏休みを元気に過ごせるようサポートしたい、私の経験や思いが未来を担う生徒たちの目標実現や成長に少しでも貢献できればと考えたからである。

2. 活動概要

【実施スケジュール】

- 8 / 19 早稲田大学から宮城教育大学（宮教大）まで移動
- 8 / 20 - 24 宮城県名取市立閑上中学校にて宮教大の学生と学習支援ボランティア（8:30 - 15:30、昼休憩有）
- 8 / 24 宮教大から早稲田大まで移動
- ※8 / 23 学習支援活動終了後、旧閑上中学校及び日和山を見学

【ボランティア内容】

閑上中学校仮設校舎にて、1年生2クラス、2年生1クラス、3年生2クラスに対する、生徒の自主学習支援を行った。参加者は早稲田大学の学生ボランティア7名及び宮教大の学生ボランティア3～9名。生徒の参加状況は日毎に漸増、午前・午後でばらつきが大きく、午後は安定的に多かった（生徒は部活や送迎バスの前後などにそれぞれ流動的に出入りする）。1、2年生は夏休みの宿題を、3年生は夏休みの宿題や高校受験に向けて塾のテキストを持参して勉強していた。また、24日は漢字検定があり、試験対策に励む生徒が多かった。閑上中学校の教諭はほぼ関わらず、時折教室を訪れるか、教室準備をしている程度であった。定刻に生徒と一緒に教室の清掃をして活動を終了した。その他に図書室の蔵書搬入・清掃・整理を司書の指示に従って行った。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

・今回の学習支援活動では、校長先生や教頭先生など多くの方とお話しし、その思いを聴くことができた。その中で印象的だった言葉のひとつは、教頭先生の「今は放っておいてほしい。子どもたちは普通に帰ることを望んでいる」という言葉である。震災後、閑上中学校の生徒たちは休校、小学校と共同の仮校舎での生活を経験してきた。さらに仮設住宅は狭く、物音が良く響き、学習する環境ではないそうだ。この8月の仮設校舎の完成によって生徒たちにやっと安定した勉強の場ができたのだと思う。学習ボランティアとして何ができるのか、何が求められているのか、自分のやり方で本当に生徒たちの力になれているのか、悩みながらの活動であったが、この言葉を聞いて、生徒たちが学習に専念できるよう、元気な笑顔が見られるよう、精一杯学習の支援をしようと改めて心に思った。大学に行き勉強できる環境があること、その日常に感謝を忘れないようにしたい。

・生徒たちの勉強する姿勢や、素直さには感動した。生徒たちが問題集で詰まってしまうところを聞いてみると、学校であまり扱っていないために理解が十分でないというのが理由であることが多かった。そこで教える際には基礎を固めることを優先した。

4. 今後どう活かしていくか

これまで震災ボランティアに参加して、一人の力は小さなものであっても継続的な活動を行っていくことが大きな力になるのだということを感じている。今後もできる活動を継続し、さらに自分が体験したことを周囲に伝えていきたい。

5. その他、伝えたいこと等

・最終日の午後は学習支援以外の仕事を担当していたので、最後に生徒たちと一緒に勉強できなかったことを残念に思っていたが、午前中まで教えていた生徒達が、「ワークがほとんど合っていた」「自分で〇〇が解けるようになったから受験はこの科目で受けることにした」「ありがとうございました」などと報告に訪れてくれたことが大変嬉しかった。生徒たちの力になれているのか心配だったが、本当に来てよかったと思った。

・昨年の鎮魂灯籠流しでは沢山の灯籠に書かれたメッセージを見た。そのメッセージは、閑上を元気づけるものや、亡くなられた方に対する思いが溢れていて、私はそれを見て心が締め付けられるようだった。しかし、この活動を通して生徒たちとの距離が縮まっていき、先生方の話を聴いて、閑上中学校や日和山を案内していただいた時、今まで以上に深い悲しみと、この生徒たちが生きていてくれて出会えて良かったという想いになった。生徒たち成長する大事な時期に関わる貴重な機会を頂けたことを大変感謝している。

「石巻好文館高等学校夏の学習会」

東北大学大学院 教育学研究科 _____ 氏名 本山 敬祐 _____

1. 活動動機

昨年の夏の学習会で一緒に勉強できた生徒とまた会えるかもしれないと思い、参加した。

2. 活動概要

日程：平成 24 年 8 月 6 日～8 月 9 日（6・7 日のみ参加）
場所：石巻専修大学

各日 9 時から 16 時まで、石巻専修大学の教室で生徒さんが自習しているところを石巻好文館高等学校の先生方と学生ボランティアが巡回し、生徒さんの質問に答えた。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

<気づいたこと>

先生方が参加されているのであまり問題ではないかもしれないが、学習ボランティアが対応できる科目に偏りがあった。とくに、理科・社会については、高校の学習内容だと人によっては全く対応できない場合がある。

<得たこと>

昨年の学習会で出会った生徒さんと再会できた。生徒さんも僕のことを覚えていてくれて嬉しかった。好文館高校の生徒さんと再会して昨年のことを振り返り、震災から 1 年以上たったことを改めて実感した。

4. 今後どう活かしていくか

去年・今年と一緒に勉強できた生徒さんに、来年もまた会おうと約束した。つぎに会うときにしっかり胸を張って会えるように、日々自分のすべきことをしっかりやっていきたい。

5. その他、伝えたいこと等

昨年度と同様、宮城教育大学の方には大変お世話になりました。宮城教育大学から最も近い大学にいる者として、大学間の連携がより深まっていくことを願っています。そのためにできることがあれば、ぜひ声をかけてください。

「塩竈市サマースクール」

東北大学大学院 教育学研究科 _____ 氏名 登川 希香 _____

1. 活動動機

昨年度同様、学習支援に携わりたいと思ったため。

2. 活動概要

日程：平成24年7月23日～8月3日（24日のみ参加）

場所：塩竈市立第一小学校

担当：6年生の国語・算数

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

クラスの明るい雰囲気や先生方との事前打ち合わせにより、学習支援に入りやすい環境をつくっていただいた。僅かな時間ではあったが、学習支援を通して子どもたちと交流することができ、震災から一年後の学校の現状をいくらか捉えることができた。しかしながら、そのクラスの状況や配慮すべき事柄など一度で判断することは難しく、時間をかけて生徒の実態を掴んでいく必要がある。学習支援としての役割を一層高めるためには、日常的に継続した活動が大切であると思う。それにより先生方や生徒たちとの信頼関係が築くことができ、学習支援としての意味合いが深まると感じた。

4. 今後どう活かしていくか

長期休暇だけでなく日常的に、学習支援に携わっていくことを今後も心掛け、継続した支援に努めたい。

5. その他、伝えたいこと等

学習支援に入る際、事前に先生方との打ち合わせや話し合いをする機会が非常に大切であると感じている。主に支援に入る学級担任の先生と学生がチームとなっていくことができれば、子どもたちの学びをより深めることができると思う。また、学習支援により先生方の負担が少しでも軽減できるようなものになっていければ良いと思う。そのためにも、学校側の求める支援のあり方を学生の方に伝えていくことが重要であり、先生と学生がより連携していくことが学校全体の支援につながっていくと思う。そして、大学側やそのほかの学生にも学習支援に対する理解を高め、各々の立場にあった協力をしてもらえれば、今後も学習支援が継続されていくと思う。

「ボランティア活動報告」

東北学院大学教養学部情報科学科 小野悠紀

1、 活動動機

以前からボランティアに興味があり、実際に参加して、学ぶこと感じることを体得したいと思っていました。今回は特に東日本大震災をきっかけに、被災した児童生徒がどのような様子・状態であるかを把握したかったためボランティアに参加しました。震災後の学校の変化や、子どもの周りの環境の変化が与えた影響を自ら学び、私は何ができるか考えてみたいと思いました。今回の大震災は私自身にとっても忘れることのできない体験であり、自身の考え方や身の回りのものや人に対する見方も変化することがありました。そのため子どもたちにとっては、大変な経験を経てどのようなことを感じ・どのように生活しているのかと考えました。震災というきっかけが、ボランティア参加に強くつながりました。

2、 活動内容

(1) 南三陸町志津川中学校での学校補助

活動日時：3/26～30日

活動場所：南三陸志津川中学校

補助内容：①使えなくなった机イス・棚・体育用マット・PC機材解体



②南三陸や志津川に関する内容の新聞の切り貼り



③部活動指導・補助一卓球部の生徒とともに練習

(2) 丸森小学校での学習支援

活動日時：3/5～9日

活動場所：

支援内容：①6年生算数一習熟度別クラス2のT2として参加

その他、学級での担任補助として6年生とともに過ごしました。

(3) 仙台市立七郷中学校での学習支援

活動日時：7/23, 26, 27, 30 8/1～3, 6, 7 (前日午前)

活動場所：仙台市立七郷中学校

支援内容：①夏季休業中の学習室での自学自習補助

教科：国語、理科、数学、英語、社会

対象：1～3年生

3、 気づいたこと・得たこと・学んだこと

参加した3回のボランティアで共通していたこととして、学校現場でのボランティアのニーズが多いことでした。現場の先生方や保護者・地域の方のみではできないことが沢山あり援助を必要としていたこと。教育現場の多忙さにより先生方が児童生徒に目を向けられる時間が減っていることが分かりました。また、どの学校でも児童生徒が自分たちで動こうという姿勢が見られました。

私は学びたいと思う児童生徒の様子から、その意志をうまく引き出し学習につなげさせることが教える側の使命であることを学びました。

4、 今後どう活かしていくか

貴重な体験をこれからボランティア活動をおこなってみたいと思う人に伝えていきます。自分から発信した情報を広く知ってもらいたいと思います。なぜなら、ボランティアの援助希望はこれからも絶えることがなく、継続していかないとその必要性が明らかではないと思うからです。その場限りのボランティアでは要請側の希望に応えることが難しいと思います。やはり、長く広い視野をもって参加していくことが大切です。

自らの考え方に新しい観点を与えたことも事実です。参加する側として何が自分には出来るのかを常に考えるようになりました。同じ目線に立って考えることの大切さも実感しました。これから教育現場に立つことを希望している身として心得ておきたいと感じました。

5、 伝えたいこと

学校現場の多様なニーズに応えられるために、日々変化する教育の様子について情報を収集することが大切だと思います。是非、現場におもむき自らの目で確かめることだと思います。

活動場所：志津川中学校

「タイトル ボランティアに参加して変わったこと」

東北学院大学 教養学部 情報科学科 氏名 阿部 夏紀

1、 活動動機

震災後ボランティアに参加したいと考えていましたが、なかなか自ら行動出来ずにいました。そんな時に南三陸町立志津川中学校での学習支援のボランティアの話がきました。私は教員を目指していてなおかつ何度か訪れたことのある南三陸町での学習支援のボランティアだったので少しでもお手伝いできればと思い参加しました。

2、 活動概要

- ・授業の補助
実際に授業に参加し教員の補助や生徒への学習支援
- ・使わなくなった机といすの解体作業
机といすの木材と金属部品に分ける
- ・教室等の清掃
教室のワックスがけや雑段の移動

3、 気付いたこと・得たこと・学んだこと

ボランティアに行く前に事前指導として生徒と接する時は慎重になるように指導を受けました。どのように生徒たちと接すればいいのか不安を抱きながら志津川中学校に着きました。休み時間や授業時間、部活動を通して会話を重ね、生徒たちは明るく気さくに私たちボランティアに話しかけてくれたことを覚えています。震災とは関係ない話題を話していてもちょっとしたことで震災の話になってしまいました。私はただ聞くことしかできずどのように対応すればいいのか難しかったです。

しかし生徒たちが自分たちから震災の話をしてくることもありました。この時、生徒たちは震災を受け止め前に進もうとしていると思いました。私は教員でもカウンセラーでもありません。私に出来ることは生徒たちとふれあい生徒たちと笑い合うことだと思います。このボランティアで、被災地の現状、継続的な復興に向けた支援の必要性、生徒たちの地元への思いを学ぶことができました。

4、 今後どう活かしていくか

何事も行動しないと始まらない。ボランティアに参加して感じたことです。ボランティアで経験したことを家族や友人に話し、被災地の現状を知ってもらおうと思います。マスコミだけでは伝えきれないことを伝えることが私に出来

ることだと思えます。

震災の記憶は年々薄れてきているように感じます。今度同じような被害を出さないようにしていくことが大切です。またいつ震災が起こるか分かりません。このボランティアで学んだことを教員になった時に子ども達に伝え、震災についてしっかりと考えてほしいと思えます。

5、 その他・伝えたいこと等

私たちが思っている以上に子ども達は頑張っています。

生徒たちはすべての支援に対して感謝をし、復興に向けて生徒自身が考え行動しています。

復興するためには子ども達の力が必要です。長期的に支援を続けていきましょ

「学府くりはら塾の5年間と私」

大学名・所属 宮城教育大学・教育心理学コース 4年
氏名 菅原滉平

1. 活動動機

平成20年6月14日、私の住む宮城県栗原市を、震度6強の地震が襲った。当時、私は高校3年生だった。猛烈な縦揺れで、学校の窓ガラスは割れ、廊下の壁や天井ははがれ落ち、数百キロある鉄製のスチームストーブさえ横倒しになった。この影響で、学校は3週間も休校となった。学校再開後も工事が続いた。工事の騒音と教室の使用制限で、大学受験を控えた私たちの学びは、大きく出遅れ、大変な困難を負った。

そんな中、いち早く教育分野で支援に乗り出してくれたのが、宮城教育大学であった。

被災してすぐの夏休み、中学生を対象に、学習支援活動をしてくれたのである。それが、「学府くりはら塾」の始まりだった。私は、大学生から直接授業を受けることはできなかったが、このような活動が行われていることに大変な感銘を受けた。

宮教大を志望していた私は、大学入学後、すぐにこの活動に参加した。それから4年間、毎年夏休みにくりはら塾に参加してきた。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

くりはら塾は、例年夏休みのお盆明けに行われてきた。

- ・栗原市内の中学校を会場に、5日間
- ・国・数・英の3教科で実施
- ・1年生から3年生まで、市内の各中学校から参加者が集まる。
- ・24年度は110名ほど参加。参加者は年々増加。



プリントに取り組む中学生たち

くりはら塾の最大の特徴は、「学生が自作のプリントを作り、「授業」を行う」ことにある。3週間ほどかけてプリントを用意する。当日は、プリントを解く→解説という流れで授業をする。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

くりはら塾は、いままで5年間、継続して行われてきた。

大学生も中学生も、「去年も参加して楽しかったから、今年も行こう」と毎年参加してくれる人がとても多い。

私もその一人である。初日、少し緊張して子どもたちの前に立つと、

「せんせー！！今年もきたよー！！」

と子どもたちから声をかけてくれる。最終日には、

「来年もきてねー！！」

と言ってくれる。この声があるから、毎年参加する元気が湧いてくる。

また、大学に入学したての1年生から、実習や採用試験を終えた4年生までがいっしょに参加するのがくりはら塾である。様々な視点から授業・プリントづくりを行うことができる。3・4年生から1・2年生にアドバイスをすることもあるし、逆に1年生の一言に上級生が反省させられることもある。その繰り返しで、くりはら塾は続いてきた。

4. 今後どう活かしていくか

栗原市では、5年間かけて復興が進み、ようやく施設や道路の復旧がある程度完了した。東日本大震災の復興は、それよりも時間がかかりそうである。去年・今年と各地で夏休みの学習支援活動が行われた。今後も、このような活動を継続していくことが必要だろう。

くりはら塾の成果

- ・毎年同じ時期に開催でき、参加者が安定
- ・自作プリントと授業で、学生側もさまざまな学びがある
- ・学生と中学生の交流の時間があり、来年につながる

くりはら塾の課題

- ・8月前半はテスト期間にあたり、プリント準備が大変
- ・学生同士のつながりを保たないと、来年以降のプリント作成が大変

学習支援活動では、自学自習のスタイルをとることが多い。手間はかかるが、くりはら塾のような授業スタイルの活動が増えると、学ぶことが多いのではないだろうか。

8月上旬に開催される活動もあるが、これだと大学の授業の関係で参加できない学生も多い。その点、お盆明けにあるくりはら塾は、とても参加しやすい日程であった。

5. その他、伝えたいこと等

私自身、くりはら塾に参加することで教員になりたいという想いを毎年強くすることができました。授業や部活動・アルバイトなど、多くの大学生の方は忙しい日々をお送りのことと思います。しかし、夏休みに2、3日がんばって時間を作り、ぜひ1、2年生のうちから学習支援ボランティアに参加してほしいと思っています。

活動場所：角田中学校、金津中学校、北角田中学校

「教育復興支援ボランティアを行って」

宮城教育大学 初等教育教員養成課程 子ども文化コース 佐野愛美

1. 活動動機

私は将来小学校教諭になりたいと思っており、そのために少しでも多くの子どもたちとふれ合いたいと思ったので参加した。また、実際に勉強を教えるというのはどのような感じであるのか、どのくらい大変なのかということを経験したいと思い参加した。

2. 活動概要

8月8日～10日にかけて角田市にある角田中学校、金津中学校、北角田中学校で、長期休業中の学習支援のボランティアを行った。この活動には上越教育大学、大阪教育大学の学生の方々も参加し、私は角田中学校でのボランティアに参加した。角田中学校では、小学校3年生～6年生までのその中学校区の小学生が集まって行う自主学習のサポートを行った。また、角田中学校の1年生～3年生までの中学生の自主学習のサポートも行った。その中で私は中学校1年生のサポートを行った。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

私はこのような学習支援の活動を行ったことがなかったので、とてもいい経験になった。1日目は一人で中学1年生を担当したのでとても戸惑ったが、2日目以降は何人かが一緒に行ってくれたので、日を重ねるごとに子どもたちともうまく関わっていくことができたと思う。ただ、中には自主学習をしないで友達とおしゃべりをしだす子どもも多く、そのような子どもたちにどのように注意すればいいのか、どのように接すればいいのかが私の一番の悩みだった。一回「そこ、うるさいよ。」と注意したが、あとで一緒に担当した学生さんにきいたところ、とても怖かったそうだ。たまに他の担当から教室を覗きにきた学生さんは、「みんな集中しているのだから静かにやろう。」などというように、諭すように注意していた。ただ頭ごなしに注意するのではなく、このように諭すように注意することが大事なのかなと思った。

4. 今後どう活かしていくか

今回一番考えたのは、みんなが自主学習を行っているときに勉強しない子ども

もがいた場合、その子どもへどう接するかということだ。中学 1 年生というような年齢の子どもたちはただ勉強しようといっても聞かない年頃だと思う。上越教育大学の学生さんは、そのような子どもたちに、「まず、最初の 5 分はしっかり集中しよう」「30 分勉強したら少し休憩しよう」などと会話をしながら子どもたちが集中して勉強できるような環境をつくってあげていた。それを見てすぐ勉強になったし、とても感心した。ただ「勉強しろ」と注意するのではなく、子どもたちの気持ちを理解したり子どもたちと接したりしながら勉強するように促すことが大事なのだなと思った。この経験を活かして、自分が将来教師になって、みんなが勉強しているのに勉強していない子どもがいたとき、ただその子を叱るのではなく、なぜこの子は勉強しないのかなど、子どもの気持ちをちゃんと理解できるようになりたいと思った。そして、今後またこのような機会があったら、このことを思い出して活かしていきたいと思った。

5. その他、伝えたいこと等

この活動で一番嬉しかったことは、質問してきた子が終わった後に「ありがとうございました。」とわざわざ言いに来てくれたことだ。私自信うまく教えられた自信はなかったが、このように何かを伝えに来てくれたことはとても嬉しかった。また、最終日のアンケートの「このような機会があったらまた参加したいか」という項目で、ほとんどの子どもたちが「参加したい」と答えてくれた。下手な説明や子どもたちへの接し方であったが、また参加したいという子どもたちが多くてとても嬉しかった。このような学習支援のボランティアは自分のためになるだけではなく、嬉しくなるようなことがたくさんあるのだなと思った。だから私はこのような学習支援のボランティアを今後も続けていこうと思う。

活動場所：丸森小学校、丸森中学校

「タイトル 丸森学習支援ボランティアに参加して」

宮城教育大学 教育学部初等教育教員養成課程 教育心理学コース

氏名：清水美那

1.活動動機

2011年3月11日の東日本大震災当時、筆者は宮城県に住んでおり、高校生だった。悲惨なニュースが飛び交う中、他の様々な県の人が、ボランティアで復興支援に携わっているのを知った。宮城県民である自分も何かしたい、という思いはあったが、高校生の時は具体的に形にできずにいた。大学生になった今年、学内メールで教育復興支援ボランティアの存在を知り、今こそ自分のできることをするべきではないか、と考え、ボランティアに参加した。

2.活動概要

期間：平成24年9月24日（月）～28日（金）

(1)丸森小学校

補助員導入授業形式

1～6年生対象（筆者は3年生を担当）

9時30分～15時30分（2時間目～6時間目）

(2)丸森中学校

数学のテスト問題作成、答案採点

1～3年生対象（筆者は1年生担当）

16時～18時



3.気づいたこと・得たこと・学んだこと

筆者は大学1年生で、まだ教育実習などを体験していなかったため、実際に教室に入って、生徒とかかわるのは初めてで、全てのことが新鮮だった。丸森小学校では補助員として教育支援を行ったが、休み時間や給食時間も生徒と過ごし、授業時間以外の時間でも様々なことを学んだ。特に、筆者が戸惑ったのは、生徒との距離の取り方である。自分たちは教育実習で来ている訳ではないが、どの程度まで生徒の活動に干渉してもよいのか、と少し悩んでしまった。また、そういったクラスでの活動について担任の先生とお話する時間あまりもてなかったことも今後の課題だと思っている。

今回支援を行った丸森町は、津波などの直接的な被害は少なかったが、福島第一原子力発電所の事故の風評被害を受けている地域であった。筆者たち学生は、自分たちからは地震関係の話をしない、もし生徒が地震関係の話を

はじめたら、生徒が満足するまで話聞く、というのを基本姿勢としていた。筆者が担当した3年生は全員放射能測定機を身につけており、放射能の影響で福島から避難してきた生徒、逆に丸森町から引っ越すことが決まっている生徒もいた。学生ボランティアの先輩方から、地震の話をはじめた生徒がいたら静かに聞くこと、聞くだけでも生徒の気持ちは楽になる、というアドバイスを受けていたため、地震関係の話をはじめた生徒がいたら相槌をうちながら、聞くことに専念した。話を聞くうちに、普段元気になっている子どもたちにも、やはり地震のショックは大きかったこと、丸森町には目に見える被害は少ないが、放射能や心の傷など目に見えない被害はまだ残っていることを知った。

4.今後どう活かしていくか

今回の丸森町での学習支援は、初めて参加したボランティアということもあり、自分の至らない部分が多すぎて落ち込むこともしばしばあった。実際、筆者が生徒たちに教えたことよりも、丸森の子どもたち、先生方、ボランティアの学生のみなさんから、筆者が教わったことのほうがはるかに多かったように思う。特に、学生ボランティアの先輩方からは、毎日の意見交換会のみならず、様々な場面でアドバイスをいただき、本当に勉強になった。これから、2,3年生にあがるにつれ、教育実習など実際に生徒とかかわる機会も多くなると思うが、今回のボランティアで見つかった課題を少しずつ、改善していきたい。また、被災地である宮城県の大学に通うものとして、これからも自分に出来る復興支援について考えていきたい。

5.その他、伝えたいこと等

丸森小学校での活動最終日に、担当したクラスの担任の先生にお礼のあいさつに伺ったときに、先生はこうおっしゃった。「生徒たちは大学生のみなさんと活動したことを、私たちが思っている以上にずっと覚えている。こういった経験は生徒たちにとっても大切なことなのです。」筆者は先生のこの言葉を聞いて、またボランティアに参加して、大学生のうちにしかできない支援をしていきたいと思った。



<写真>

1 ページ目

9月25日 丸森中学校校長室にて
テスト問題作成時

2 ページ目

9月28日 丸森小学校3年1組にて

活動場所：大和町立大和中学校

「たいわサマースクールに参加して」

大学・学部・研究科名 宮城教育大学 氏名 菅原 利恵

1. 活動動機

夏休み中ということもあり、普段はあまり行くことができない遠方に出向き、復興支援に携われると思ったからです。また、中学の数学・英語は得意科目でもあったため、少しでも力になれる良い機会だと考えました。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

実施場所 大和町立大和中学校
期 間 平成24年8月7日 8:45～11:50
内 容 自学自習支援(数学・英語の1学期の復習。テキストを活用。)

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

中3のクラスに入りましたが、数学・英語が得意な子と苦手な子に取り組む姿勢の違いが見られました。自学自習の時間なので、個人個人のペースで進めれば問題ないのですが、やはり解けない問題を前にすると「できない」と言っておしゃべりを始める子が多く見られました。私達ボランティアスタッフに対して、気軽に質問するというのは子供達にとって少し恥ずかしさもあるらしく、私達が声をかけてくれるのを待っているという子もいました。声をかけると質問をどんどんしてきたり、おしゃべりをしていた子でも一緒に解き始めると、きっかけをつかんで集中したりするようになりました。今回のクラス全体を見てみて、すぐに先生に質問できる子は良いとして、恥ずかしさからなかなか言葉にできない子のつまづきを、時々見つけてあげるのも必要だと思いました。

4. 今後どう活かしていくか

今後、ボランティアやサークル活動、実習などで、様々な年齢層の子供達と関わる機会があると思いますが、目に見えている現状に対してだけの指導に満足せず、私から子供達を探っていけるように意識していこうと思います。それから、勉強内容の方では、応用問題の解法だけがつまづくポイントだと断定せず、基本の中の基本事項であっても、理解できない部分があるのだということを把握して対応する力を身に着けなければならないと思いました。

基本事項だからこそ丁寧に教えられるように、私自身学びを深めていきたいと感じました。

5. その他、伝えたいこと等
特にありません。

以 上

活動場所：丸森小学校、丸森中学校

「丸森町小・中学校学習支援ボランティアについて」

宮城教育大学教育学部 特別支援教育教員養成課程
発達障害教育コース1年目

氏名 中村 かおり

1. 活動動機

先の東日本大震災において、宮城県在住の自らも家屋の一部損傷等の被害を受けたが、時間の経過・自宅が内陸地域であることから、徐々に震災の意識が薄れつつあった。親しい友人を含め身近な人が沢山被災したにも関わらず、テレビやラジオで毎日のように耳にする震災関連のニュースがいつの間にかどこか他人事のように感じられ、それに伴う福島第一原発の事故については、隣県で起こっているという実感を持たずにいた。丸森町での活動で実際に現地へ赴き子どもたちのふれあうことで、被災地の今を知るとともに自身の震災に対する意識を高めることができるのではないかと考え、参加を希望した。

2. 活動概要（活動先、期間を含む）

4泊5日の日程で、丸森小・中学校での学習支援活動。

・丸森小学校

通常学級(担当:2学年)に入り、T2またはT3での授業サポート。集中できない児童や授業のペースについていけない児童等に対する声掛け・指導と中心とし、紙芝居や休み時間・放課後の遊び相手などをした。

・中学校

朝の数学小テストの作成及び採点(コメント付け)と、修学旅行報告会の出席。

・被災地見学

丸森町から近い、宮城県山元町の海岸周辺の見学。

・斎理屋敷見学

丸森町の観光地である昔の豪農の邸宅を利用した資料館の見学。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

街の様子において目に見える被害はあまり確認出来なかったが、実際に学級に入ってみると、子どもたちは首から線量計を下げたり、水道の水(特に外のもの)が飲めないために体育の時間は持参した水筒の水を飲むようにするなど放射能に対する取り組みが見られた。また、給食時には、放射能の影響を

懸念する保護者に言われて牛乳の飲まない生徒もおり、学校生活の中に原発の放射能被害の様子が徐々に垣間見えた。しかし、休み時間には校庭に出て元気いっぱい遊び、とびきりの笑顔を向けてくれる子どもたちに、最初は安堵感すら覚えた。(テレビで見聞きしていたような状況(外で遊ばせない等)と違っていたため)

丸森町は宮城県内で最南の町であり、線量の数値的には福島県内同等のデータが出ていながら、県境をまたいでいるという理由から放射能被害の十分な支援がなされていないらしいという現状は事前にニュース等で認識していたが、幸か不幸か現地の児童らの学校生活は上記の事項以外は特段変わった様子もないように思われた。しかしながら、最終日の斎理屋敷見学では、そこで働くガイド役の方から、放射能の影響で震災前よりも観光客が激減していて大変厳しい状況に追い込まれているという事実を伺った。風評被害という言葉の意味を実感した瞬間だった。

4日目の被災地見学では、山元町沿岸部を訪問した。震災から1年半以上が経過したが、今もなお瓦礫があることに驚きを隠せなかった。また、境界線を境にそこから先は海まで何キロもずっと見渡す限り何の建物も無い原っぱになっており、被害を受けた小学校では、ぐちゃぐちゃの校舎内、おもちゃのように山積みされた車を目の当たりにし、想像を絶する津波被害の大きさに思わず言葉を失った。その後その学校の児童は体育館の高いところに避難し全員が助かったという話を聞いたが、学校の目の前にあったであろう住宅地は、すべて土台のコンクリート部分が残るのみとなっていた。助かった生徒の中には孤児となった児童もいただろうと察すると、毎日直接子どもと接していたため居たたまれないものがあつた。漁港からは福島県内の港が向こう側に見えた。放射能被害は丸森町の人々の暮らしの中に、確かに存在していた。

4. 今後どう活かしていくか

瓦礫の除去作業などの復興は目に見えて進むが、目に見えない放射能被害、特に風評被害は人々の記憶に留まり続け、いつまでも被災地を苦しめる。実際にそこに住み、暮らしている人々がいる。子どもたちがいる。それを知ることが出来たことは、自身の心境の中に大きな変化をもたらした。原発被害をより身近に感じられるようになり、毎朝見るニュースもいつもより関心を持つようになった。震災関連のボランティアは時間の経過とともに減少する傾向にあるようだが、まだまだ継続的な支援が必要だと感じた。震災の記憶を子どもたちに伝えつづけ、尊い犠牲を繰り返すことのないように出来たらと思う。教育大学に身を置く学生として、出来ることは何かを考え、実際に行動に移していきたいと思う。

「梨の花プロジェクト」

宮城教育大学 教育学部中等教育教員養成課程 英語教育専攻

氏名 相澤幸之助

1. 活動動機

これまであまりボランティア活動と縁がなかったので、やってみようと思った。また、実際に中学生と接する機会は、教員を目指す自分にとって有意義だと思ったので参加した。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

活動先：大熊町立大熊中学校

期間：9月18日～21日

英語の授業に参加し、生徒の質問や分からないことを詳しく教えるなどの活動を三日間行った。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

大熊中の英語教師である畑中豊先生の授業は、プロジェクタやホワイトボードなど様々な器具を利用した斬新なものでとても刺激的だった。また、生徒指導をしている様子も拝見することができて、生徒との接し方をしっかり学ぶことができた。

4. 今後どう活かしていくか

中学生と実際に教育現場で接する機会はなかったので、どういった接し方をすればよいのか分かった。また、実際に生徒たちがどのようなことを理解しづらいか、学習が定着しないかを知ることができたので、今後の教育実習などに活かしていきたい。

5. その他、伝えたいこと等

会津の生徒たちはとても元気で積極的に様々な活動を行っていて、こちらが元気をもらってしまいうらいだった。また、こういった活動があれば参加してみたいと思う。

以上

※梨の花プロジェクトとは：

宮城教育大学の根本アリソン特任准教授が立ち上げた福島県大熊町の幼稚園・小学校・中学校に対するボランティア活動を行う企画。

大熊町は原子力発電所の影響により立ち入り禁止区域となっており、現在は町役場はもちろん、幼稚園、小・中学校も会津若松市にその機能を移してる。

アリソン教授はその大熊町のALTとして長年活動してきたため、今回このような企画を立ち上げ、英語科が中心となって教育支援のボランティア活動を行ってきた。

「梨の花」は大熊町の特産品が梨であることからつけられた。

「梨の花プロジェクト」

宮城教育大学中等教育教員養成課程英語教育専攻 E4468 西岡 慧

1. 活動動機

被災した現場を訪れ、どれだけ復興が進んでいるのか肌で感じるとともに、自らも復興のために何かしたいと思ったから。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

福島県会津若松市
大熊中学校 1日間
大熊幼稚園 2日間

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

被災地の子供たちは心に深い傷を負っていても元気で、学ぶことに必死だった。また、大熊中学校で指導して下さった畑中先生に英語の授業のあるべき姿を学んだ。

4. 今後どう活かしていくか

被災地の現状を把握できて、まだまだやらなければいけないことがたくさんなると感じたことに少しでも多く関わっていけるように努力していきたい。
畑中先生に教わった英語の授業のあるべき姿を参考にしてこれからも英語教育者を目指して勉学に励みたい。

5. その他、伝えたいこと等

ボランティアに直接行ってみたいとわからないことがたくさんあるので、まだ未経験の学生にはぜひ何かしらのボランティアに参加してほしいと思う。

※梨の花プロジェクトとは：

宮城教育大学の根本アリソン特任准教授が立ち上げた福島県大熊町の幼稚園・小学校・中学校に対するボランティア活動を行う企画。

大熊町は原子力発電所の影響により立ち入り禁止区域となっており、現在は町役場はもちろん、幼稚園、小・中学校も会津若松市にその機能を移してる。

アリソン教授はその大熊町のALTとして長年活動してきたため、今回このような企画を立ち上げ、英語科が中心となって教育支援のボランティア活動を行ってきた。

「梨の花」は大熊町の特産品が梨であることからつけられた。

「梨の花プロジェクト」

宮城教育大学 教育学部 中等教育教員養成課程 英語専攻 堀籠 崇志

1. 活動動機

先の東日本大震災により傷ついた被災地に対して、少しでも復興の力になりたかった。教育の現場に立つことのできる機会は、自分にとってそうあるものではないので、自身のスキルアップになると考えた。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

活動先：福島県 会津若松市 大熊中学校

期間：3泊4日

中学校1～3年生の英語の授業補助。クラス活動の補助。

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

畑中 豊先生の授業を見ることは自分にとって大きな影響となった。学校教育だけで英語が話せるようになるには限界があると考えていたが、畑中先生の授業を見ることでそれは間違いであると気付かされ、自分が目指すべきものがはっきりした。

4. 今後どう活かしていくか

授業を行う技術や生徒とのパワーゲームをどうおこなっていくかなど多くのことを学んだ。中でも教育に懸ける熱意は自分が最も学ぶべきものだと思うので、熱意をもって大学での勉学に励みたい。

5. その他、伝えたいこと等

今回のプロジェクトは学生にとって非常に良い機会だったと思う。これからも引き続き行われていくことを切に願う。

以 上

※梨の花プロジェクトとは：

宮城教育大学の根本アリソン特任准教授が立ち上げた福島県大熊町の幼稚園・小学校・中学校に対するボランティア活動を行う企画。

大熊町は原子力発電所の影響により立ち入り禁止区域となっており、現在は町役場はもちろん、幼稚園、小・中学校も会津若松市にその機能を移してる。

アリソン教授はその大熊町のALTとして長年活動してきたため、今回このような企画を立ち上げ、英語科が中心となって教育支援のボランティア活動を行ってきた。

「梨の花」は大熊町の特産品が梨であることからつけられた。

「梨の花プロジェクト」

宮城教育大学 教育学部 中等教育教員養成課程 英語教育専攻 氏名 茂泉宥哉

1. 活動動機

初めてのボランティア活動としていい機会となったため。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

活動先：大熊町立大熊幼稚園

期間：9月18日～21日

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

被災地の園児の様子。自分の家に帰ることもできないのに、普段の生活の中ではそんなことを微塵も感じさせない様子だった。

4. 今後どう活かしていくか

年齢の近い私たち大学生にできることを探し、ボランティア活動をしていきたいと思った。

5. その他、伝えたいこと等



以上

※梨の花プロジェクトとは：

宮城教育大学の根本アリソン特任准教授が立ち上げた福島県大熊町の幼稚園・小学校・中学校に対するボランティア活動を行う企画。

大熊町は原子力発電所の影響により立ち入り禁止区域となっており、現在は町役場はもちろん、幼稚園、小・中学校も会津若松市にその機能を移してる。

アリソン教授はその大熊町のALTとして長年活動してきたため、今回このような企画を立ち上げ、英語科が中心となって教育支援のボランティア活動を行ってきた。

「梨の花」は大熊町の特産品が梨であることからつけられた。

「震災からの復興～私たちが今できること」

宮城教育大学教育学部 初等・教育学コース2年 渡部早紀

1. 活動動機

- ・ 前回も参加したことからの活動のしやすさをふまえて

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

- ・ 丸森町立丸森小学校での学習支援
(9月24日～28日)
- ・ 国民宿舎あぶくま荘に宿泊

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

- ・ 丸森という「地域」に与えた震災の影響
- ・ 丸小に与えた震災の影響
- ・ (個人的に) 生徒指導のあり方

4. 今後どう活かしていくか

- ・ 次世代の私たちの課題「そうぞう力」(丸森町教育委員長のお話から)
- ・ 児童・生徒側の理解の主体化

5. その他、伝えたいこと等

- ・ 地元ボランティアの再普及の促進

「ボランティアをして気付いたこと」

宮城教育大学 教育学部 初等教育教員養成課程 教育学コース

加藤 郁美

1. 活動動機

大学生である自分にもできる東日本大震災に対するボランティアをやりたいと入学当初から考えていて、実際に被災にあった子どもたちへの学習支援のボランティア募集があるのを知り、参加を決意しました。

2. 活動概要(活動先、期間を含む)

場所：仙台市立中野栄小学校

（現在校舎が使えないため中野栄小学校に間借りをしています。）

活動期間：2012年4月～現在

内容：授業補助

学校行事の運営補助

休み時間等の遊び相手

3. 気づいたこと・得たこと・学んだこと

中野小学校に行くようになって初めて被災した子どもたちの多くが現在仮設住宅に住んでいて、スクールバスで長い時間をかけて小学校に通っているということを知りました。また仮設住宅であることから勉強時間や勉強する環境の確保が思うようにできないという現状についても知ることができました。

しかし、子どもたちはとても元気で見ているだけでは被災した、被災していないはあまりわかりません。ですがいまだ多くの子どもたちが震災の影響を受けていることを改めて感じました。また私自身の中にもう復興したという気持ちがあり、震災に対する気持ちが薄れてきてしまっていたことに気づかされました。

4. 今後どう活かしていくか

私たちが相手にしているのは子どもたち“人”です。私はこのような状況であることをボランティアチーム全員が理解した上で、一人ひとりに合った私たちにできることを考え、中野小の子どもたちと関わっていきたいと思っています。

5. その他、伝えたいこと等

最近では仙台駅周辺を見てもう復興したのかなと思ってしまうことがあります。ですが被災地に足を運んでみると震災の爪痕が残っていて、被災した多くの人が仮設住宅に住んでいるなどまだまだ復興への道は遠いように感じます。テレビの報道も節目にしかされなくなり、震災に対する気持ちが徐々に薄れているように感じます。

私たちはこの震災に向き合っていかなければならない世代だと思います。大学生にもできること、大学生だからこそできる支援もたくさんあるはずです。もっと多くの大学生に震災にもう一度向き合ってもらいたいと思います。



国立大学法人
宮城教育大学



このパンフレットは環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で
印刷しております。